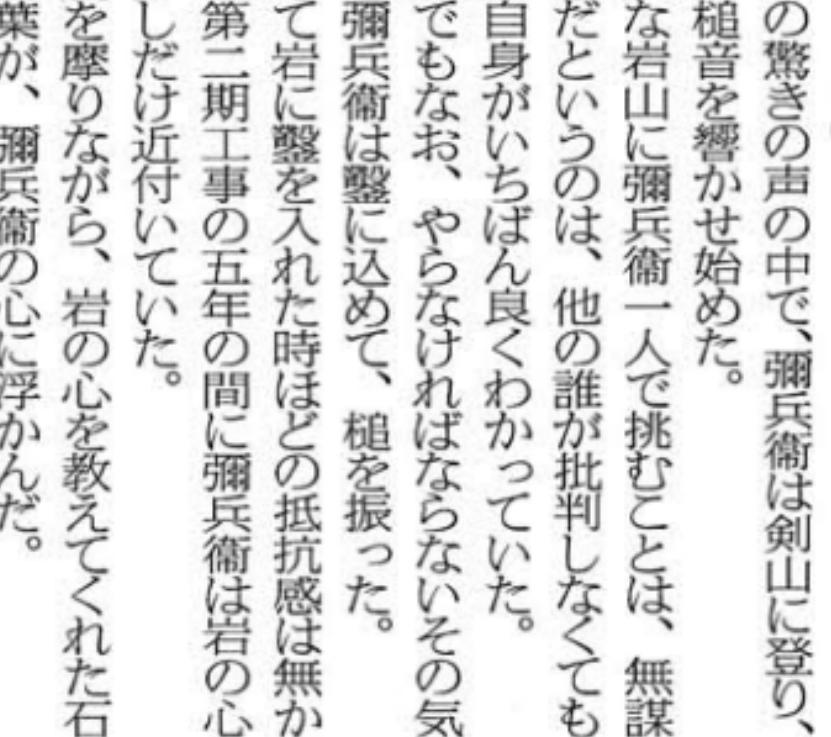


悠久の河

24

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子



画 高田勲

一所懸命

「周藤の旦那さんが一人で、剣山に登つておられるぞ」

「せっかく完成した切り通しを一人で埋めてしまつつもりか」

人々の驚きの声の中で、彌兵衛は剣山に登り、再び、槌音を響かせ始めた。

巨大な岩山に彌兵衛一人で挑むことは、無謀なことだというのは、他の誰が批判しなくても彌兵衛自身がいちばん良くわかつていた。

それでもなお、やらなければならぬその気持ちを彌兵衛は鑿に込めて、槌を振つた。

最初で岩に鑿を入れた時ほどの抵抗感は無かつた。第二期工事の五年の間に彌兵衛は岩の心に、少しだけ近付いていた。

岩肌を摩りながら、岩の心を教えてくれた石工の言葉が、彌兵衛の心に浮かんだ。

「おまえたちには、おまえたちの大切な仕事が与えられている。その仕事に精を出せ」

彌兵衛は身内の援助さえも受け入れなかつた。

「庄屋の旦那さんは、とうとう、おかしくなつてしまわれた。かわいそうにおお」

「偏屈者よのお」

彌兵衛の心の内も分からず、村の人々は噂しながら断つた。

ただ、彌兵衛は雨の日も風の日もただ黙々と剣山へ出掛けた。クニも勘六も、それを黙つて見送つた。そつとておくことが、今の彌兵衛にどうか。その度に、クニは五郎太の手を取り、首を横に振つた。

「旦那さまのやりたいことを、気の済むまでやらせてあげましょうよ」

「けど……」

五郎太は、その度にクニに逆らいたい気持ちになつた。

「今、人々の噂に負けて、旦那さまを連れ戻して、旦那さまは、幸せでしょうか？私たちに出来ることは、じつと我慢することです。今、私たちが負けてはなりません」

クニは毅然たる態度で、五郎太をたしなめた。

「いったい、どうしたら、旦那さまや御内儀さまのように強くなれるものでしょうか？」

五郎太は尋ねずにはいられなかつた。

「ただ、一所懸命になることです」

クニは笑つて答えた。